

小学校 教育相談

幼保小連携における教職員間の関係構築に関する研究

教育相談課 研究員 井澤 ゆう子

要 旨

幼保小における教職員間の関係を構築させるプログラムを作成・実践することで、幼保小の教職員間の関係が構築されるかどうかを検証した。その結果、教職員間の関係構築を測るため「協働のレベル」を用いて分析したところ、レベルの段階の向上が見られるなど、プログラムの有効性が示唆された。

キーワード：幼小接続期 幼保小の教職員間の関係構築プログラム 小1プロブレムの軽減

I 主題設定の理由

入学したばかりの1年生で、集団行動がとれない、授業中座ってられない、話を聞けない等の状態が数箇月継続するといった「小1プロブレム」が問題となってから20年程の年月が経つ。実際、私自身の教職経験からも、入学したばかりの児童の実態として、前述のような様々な気になる行動が見られ、どのように関わったらよいか対応に悩むことが多かった。

新保(2001)は、「小1プロブレムは、高学年の学級崩壊とは異なり、幼児期を十分、生ききれてこなかった、幼児期を引きずっている子どもたちが引き起こす問題」と指摘し、その背景として、「子どもたちを取り巻く社会の変化」「親の子育ての変化と孤立化」「変わってきた就学前教育と変わらない学校教育の段差の拡大」「自己完結して連携のない就学前教育と変わらない学校教育の段差の変化」を挙げている。就学前教育と小学校教育との段差について、小林(2009)は、子供の目線から考えることが大事であり、「教育環境の違い」「教師の子どもに対するかかわり方の違い」「教える内容と方法の違い」のことであると述べている。そして、小1プロブレムの解決には、この段差を滑らかに接続して入学前後における子供の心理的な負担を軽減していく取組が必要であることを指摘している。

文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(2010)では、幼児期の教育と児童期の教育は、子供の発達や学びの連続性を保障するためにも円滑に接続され、子供に対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることは極めて重要であると述べている。また、幼児期の教育と小学校教育の接続(以下、幼小接続)を円滑に進めることは、児童のより良い小学校生活のスタートや、小1プロブレムの発生の防止に繋がることも指摘している。小学校学習指導要領や幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても、円滑な幼小接続が図られることを述べている。しかし、幼小接続に関する現状をみると、文部科学省「平成28年度幼児教育実態調査」において、市町村ごとの幼小接続の状況は、ステップ4段階のうち「ステップ2(年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない)」の段階が57.6%と最も多いという結果になっている。

幼小接続に関する先行研究では、接続において重要なことは、子供同士が実際にふれ合ったり、教員同士が顔を合わせて話し合ったりする等「顔が見える関係」を構築すること(東京学芸大学, 2010)や、接続期の間は両者で関わり合う必然性を構築すること(島根県教育センター, 2012)と述べている。また、教育課程の接続に関しては、より滑らかな接続の基盤となるものは児童理解であること(島根県教育センター, 2012)を指摘していることから、幼小接続を図るには、まず第一に幼保小の教職員同士が顔なじみになり、それぞれの立場から意見を忌憚なく言い合える関係を築くことが重要であると考えられる。

そこで、本研究では、幼保小の教職員を対象とした教職員間の関係構築プログラムを作成・実践することで、教職員間の関係が構築され、結果として、小1プロブレムの軽減に繋がるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究目的

幼保小の教職員を対象とした教職員間の関係構築プログラムを作成・実践することを通して、幼保小の教職員間の関係が構築されるかどうか明らかにする。

III 研究の実際とその考察

1 幼保小の教職員間の関係構築プログラムの作成について

(1) 幼小接続期について

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校（2008）では、接続期を「人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴い、子どもたちの戸惑い・不安・期待・緊張などを、教師が丁寧に受けとめ支えながら、教師や友だちとの豊かな関わりを基盤に、主体的に学ぶ姿勢を育む時期」と定義し、環境の変化に伴う子供たちの戸惑いや不安が少なくなるよう、滑らかに接続していくことを示している。そして、接続期を前期・中期・後期の三つに分け、以下に示す「接続期のねらい」をもって取り組んでいることを述べている。

《接続前期（5歳児10月～3月）》関わりを広め、深める。小学校生活に向け、体験の共有化を図る。

《接続中期（小学校入学～）》幼稚園から小学校生活へ安心して移行し、自分を表現できるようにする。

《接続後期（～小学校1年7月）》知への興味を耕し、自分で考え学んでいこうとする姿勢を伸ばす。

なお、「中期と後期の境は、子供たちの様子や生活の流れにしたがって、柔軟に変えていくほうが実際的であると考え、時期の区切りを決めず弾力的に扱っていくことを示す」としている。

この考えを踏まえ、本研究では、接続期を、新1年生のための環境整備を図る接続前期、小学校生活における児童の気になる行動を通して児童理解を図る接続中期、授業における児童の気になる行動を通して児童理解を図る接続後期と区分し、これらの期間を検証期間とした。

(2) 教師間の関係構築プログラムについて

佐古ら（2003）は、教師の協働とリフレクション（省察）を基本的な要素とした学校改善プログラム（コア・プログラム）の開発を行った（図1）。その内容は、個々の教師レベルでの実践知の蓄積・更新と、教師集団における交流、共有、更新の過程を連動させることによって、①教師それぞれの教室における教育実践（授業や学級経営）の改善と②教師間の協働関係の構築を実現していくことを述べている。

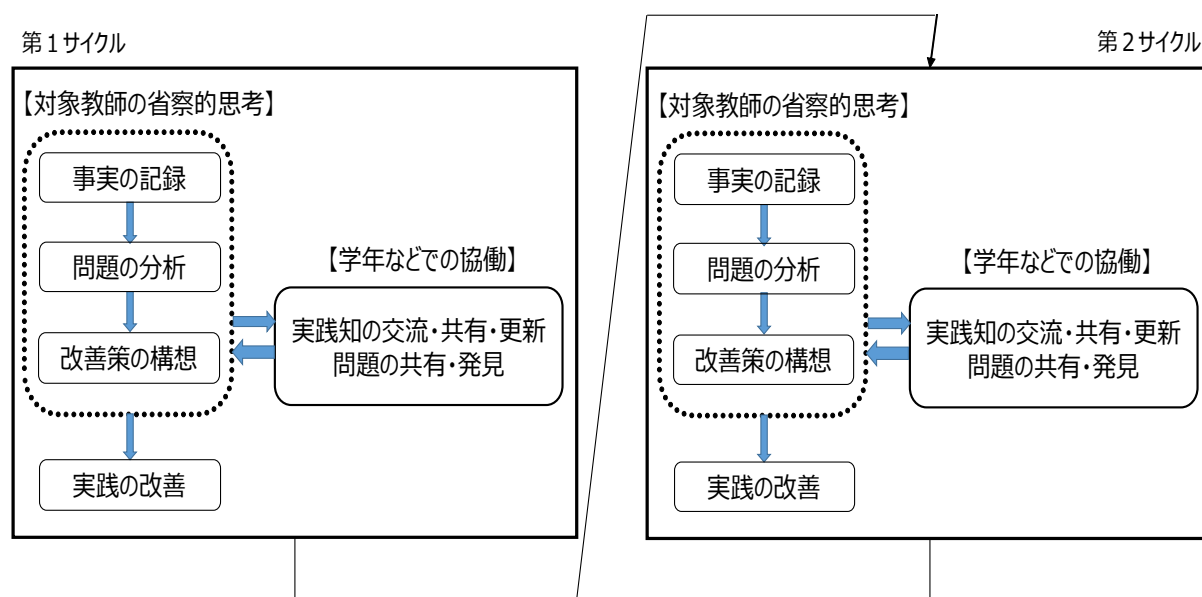


図1 佐古ら（2003）のコア・プログラムのユニット

注：コア・プログラム（図1）は、図中に示した「第1サイクル」の過程を、第2サイクル、第3サイクル…と連続的・継続的に実施することが述べられている。

(3) 教師間の関係構築に関する先行研究について

田中（2003）は、学校改善プログラム（佐古ら，2003）に基づき、道徳や体育等の合同活動を組み込んだプログラムを開発し、小学校異学年間の教師を対象にプログラムの効果検証を行った。この合同活動のねらいについては、①学級の課題への直接的な関わり②学級の課題の指摘③学級の壁を越えた共通の課題を共有し、解決策の検討ができることを挙げている。検証の結果、合同活動や相互検討といったものを媒介にして協働意識の形成がなされ、教師間の協働関係が構築されたことを示し、同学年でも実施可能であることを述べている。しかし、異校種間の教師を対象にしてこのプログラムが実施・検証された報告は見られていない。

(4) 本研究の全体イメージ

本研究の目的と、小1プロブレムの軽減との関連をまとめる(図2)。段差の相互理解や児童理解、児童の気になる行動への関わり方について話し合える内容でプログラムを作成し実践することで、幼保小の教職員間の関係が構築され、そのことにより一層児童理解が図られることで、教育課程の編成や実施に生かされ、結果的に小1プロブレムの軽減に繋がると考えた。そこで、本研究では、幼保小の教職員間の関係が構築されたかどうかを検証していく。

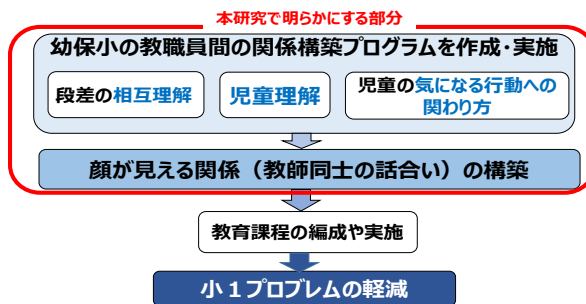


図2 研究の目的と小1プロブレム軽減の関連

2 プログラムの概要と作成上の工夫

本研究では、佐古・田中ら（2003）のプログラムに基づき、小学校1年担任の幼小接続期における児童（特に気になる行動）に関する教師のリフレクション（省察）と、それを基にした幼保小の教職員間の情報共有と相互検討（協働）からなるプログラムを作成し（表1）、以下の3点を工夫した。

- (1) 幼保小の教職員間の関係構築を図るために、就学前教育と学校教育の段差の相互理解や児童理解、児童の気になる行動への関わり方について、情報共有と相互検討（協働）できる内容にしている。
- (2) 幼保小の教職員間の情報共有と相互検討（協働）する際に、幼児・児童の実際の様子を共に見る活動（ビデオに録画した映像や参観）を組み込んでいる。
- (3) 相互検討のテーマは、前述の1（1）幼小接続期を踏まえて、前期は小学校生活に向けて環境整備を図る、中期は小学校生活における児童の気になる行動を通して児童理解を図る、後期は授業における児童の気になる行動を通して児童理解を図る内容にしている。

表1 幼保小の教職員間の関係構築プログラム

実施期間		相互検討 テーマ		時間と場所
接続 前期	3月	新1年生のための環境整備に向けて	写真や園の見学を通して話し合う。	【実施時間】 放課後 【実施場所】 園
接続 中期	4月	児童の気になる行動について ～集会、朝自習、休み時間において～	児童の様子を録画した映像を見ながら話し合う。	
	5月	児童の気になる行動について ～集団行動（運動会の練習）において～		
6月	児童の気になる行動について ～給食時間において～			
接続 後期	7月	児童の気になる行動について ～授業中において～	保育参観を通して話し合う。	
	8月	園での関わり方について ～年長児の活動において～		

※4月は実施できなかった。そのため、6月のテーマが3月の相互検討において課題として出されたので、4月のテーマを6月に変更して実施した。

3 検証方法について

(1) 協働のレベル

協働のレベルは、佐古・田中ら（2003）によって作成され、教師間の関係の変容を測ることができる。協働のレベルの基本的概念を、協働のレベルとして4段階に設定し、更に具体的な内容を示している（表2）。この協働のレベルは、提示された課題が共有されているかどうかにより分類されている。

本研究では、これを基に本研究の協働のレベルに置き換え（表3）、相互検討の発話データのレベル（質）の変容を検証するために使用した。なお、相互検討における発話データの分析は以下の手順で行った。

- ①発話をブロック（内容）ごとに分ける。
- ②見出しをつける。（発話を要約）
- ③課題が何か抽出する。
- ④課題のレベルを「協働のレベル」（表3）に基づいて判定する。

表2 佐古、田中ら（2003）の「協働のレベル」

協働レベル	概要	内容
I	一方的提示	課題に対する機械的なコミュニケーションは発生しているが、課題の共有や知識の共有には至らない過程が発生する。
II	担任教師が認識している課題の共有	自分の学級の課題が開示され、開示された課題に相手側の教師が関与し、共同して解決する過程が発生する。
III	担任教師が認識していない課題を提示し、それを共有	担任教師が気付かない学級の課題が相手から開示され、その後共同して解決過程が発生する。
IV	個別教師の課題ではなく、教師共通の課題の発見と共有	お互いの学級の課題を越えて共通した児童の課題が発生し、解決過程が発生する。

表3 幼保小の教職員用に本研究で置き換えた「協働のレベル」

協働レベル	概要	具体的内容項目
I	一方的提示	① 小学校の教師が「自分の認識している児童の気になる行動」を話す。
		② 園の教師が「園の頃の様子」や「園での関わり方」を話す。
II	小学校の教師が認識している課題の共有	① 小学校の教師が提示した「自分の認識している児童の気になる行動」に対して、園の教師が共感的に受け止め、「園での関わり方」について話し合われるプロセス。
		② 小学校の教師が提示した「自分の認識している児童の気になる行動」に対して、「 解決策（改善策）の考案 」について話し合われるプロセス。従って、「解決策」などの結論までは、到達しなくてもよいものとする。
III	小学校の教師が認識していない課題を提示し、それを共有	① 小学校の教師が認識していない 「児童の気になる行動」や「児童への関わり方」を園の教師が指摘し、それに対し「反論」や「普段の児童の様子」について話し合われるプロセス。
		② 小学校の教師が指摘された「児童の気になる行動」や「児童への関わり方」を認め、それに対して「 解決策（改善策）の考案 」が話し合われるプロセス。従って、「解決策」などの結論までは、到達しなくてもよいものとする。
IV	園と小学校の共通の課題の発見と共有	① 小学校から提示された「児童の気になる行動」や園から指摘された「児童の気になる行動」を検討していく中で、両者が感じる「児童の気になる行動」が、実は「 お互いに共通する課題 」だということに気付くまでの話し合いのプロセス。
		② 「お互いに共通する課題」を認め、それに対する「 解決策（改善策）の考案 」へと変化するプロセス。

(2) 半構造化面接

幼保小の教職員間の関係構築プログラムが、教師にどのような意識変容をもたらすのかを検証するために、個別に半構造化面接を行った。質問項目は、幼保小連携（協働）の感想を聞くための項目と児童の関わり方に対する意識の変容についての項目を準備した。

4 研究の実際について

(1) 対象者

研究協力小学校の第1学年担任1名、研究協力園の年長児元担任1名、計2名を対象とした。

(2) 実施期間

2019年3月から8月まで、毎月1回のペースで毎回45分程度プログラムを実施した。プログラム実践の効果に関する調査として、プログラム実施後の9月に半構造化面接を行った。

(3) プログラムの実施と結果（協働のレベル）

プログラムにおける相互検討の概要とその結果（図3～図7）、教師の感想（発話データのまま一部抜粋）を以下に掲載する。なお、図中のレベルは、表3の「協働のレベル」に基づいて表示したものである。

ア 第1回「新1年生のための環境整備に向けて」（3月）

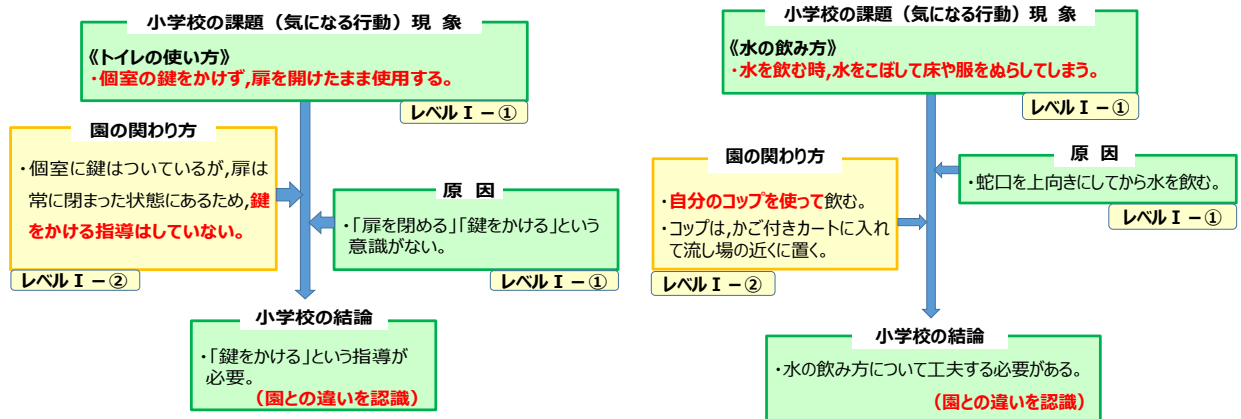


図3 第1回相互検討の概要とその結果

小学校教師の省察として、第1、2年の教師2名を対象にアンケート「これまで入学してきた子どもたちの様子から、環境面で困ったこと」を依頼し、回答を得た。その結果、「環境面に関すること」と「園での指導に関すること」に分類され、これを基に相互検討が行われた。「環境面に関すること」として、小学校から提示された課題（児童の気になる行動）は、「トイレの使い方」と「水の飲み方」の2点で、課題に対する原因についても述べられた。これに対して、園からは園での関わり方や課題に対する解決策が示された。トイレについては、使い方だけでなく、明るさや衛生面についても話題に挙がった。この話合いを通して、園と小学校の環境の違いについて、共通認識が図られた。また、「園での指導に関すること」として、小学校からは「給食指導、読み書き、並び方、聞き方」等の質問が出され、これに対して園からは園児の実態と園での関わり方について話された。

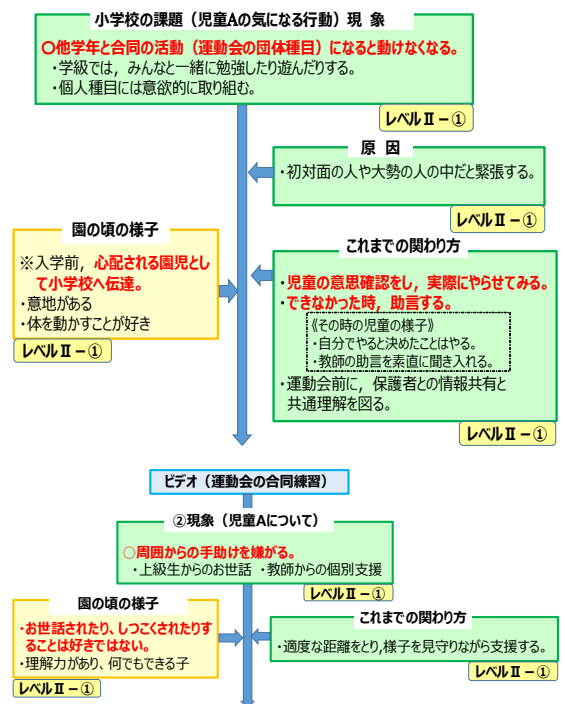
小学校の教師からは、「話してみると分からないことがいっぱいあって、すごい参考になることがたくさんでした。」（原文ママ）という感想が聞かれた。

この回の相互検討では、小学校の教師から一方的に提示された課題や質問に対して園の教師が答えるということが中心に行われた。そのため、協働のレベルは「レベル I-①、②」であった。

イ 第2回「児童の気になる行動～集団行動において～」（5月）

小学校からは、児童Aの「他学年との合同活動になると動けなくなる」という課題（児童の気になる行動）が提示され、考えられる原因とこれまでの関わり方も示された。この課題は、入学前に幼保小の教職員間で行われる新入学児童についての情報交換の場において、園から口頭伝達されており、小学校から提示されたことで共通認識が図られた。そのため、園の教師はこの課題に対し、園の頃の児童の様子や関わり方について話すなど積極的に関わり、課題の解決策を検討するまでに至った。また、実際の映像を見る中で、子供達の頑張っている様子を伝えたり、小学校生活に適應できているかどうか指摘したりするやりとりが見られ、児童A以外の子供達についての情報交換がされた。

園や小学校の教師からは、「園の頃は、一つのことを体験したから次からは大丈夫！ということはないので、ほんとに成長だなと思います。」「今はみんな初めてなので、最初は不安要素がいっぱいだと思うけど、『できる！大丈夫！』っていう自信を少しずつつけていきたいと思います。」（原文ママ）と



いう感想が聞かれた。

この回の相互検討では、小学校の教師から提示された課題（児童の気になる行動）が、園の教師も認識していた課題であったため、園の教師が園のの様子や関わり方について話す、映像から見られる課題を指摘する、課題に対する解決策を検討するなど、積極的に関与するということが行われた。そのため、協働のレベルは「レベルⅡ-①、②」へと変容する話合いであった。

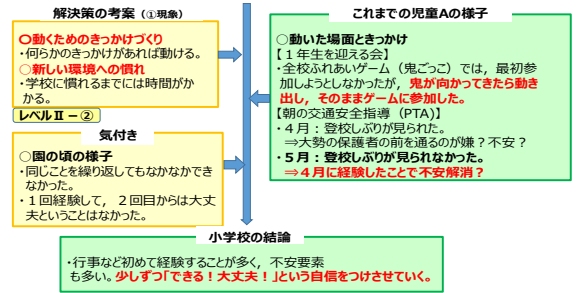


図4 第2回相互検討の概要とその結果

ウ 第3回「児童の気になる行動～集会、朝自習、休み時間において～」(6月)

小学校からは、児童Bの「休み時間、一人で遊んでいることが多い」と児童Cの「児童Aを意識し過ぎる」という二つの課題が提示された。一つ目の課題に対して、園の教師は、園の頃の様子について話したり、実際に遊んでいる様子から考えられる原因を指摘したりする等、課題の解決策を検討するまでに至った。二つ目の課題に関して、小学校からは児童Cの具体的な行動として、休み時間はいつも一緒にいたり、図工の時間は真似して描いたりするということが挙げられた。これに対して、園の教師は、前者については園の頃も同様であったこと、後者についてはそのような行動が見られず、それ以外の行動について話すだけであったため、小学校の教師にとっては園の頃の様子を知ることには繋がったが、解決策の考案までには至らなかった。

小学校の教師からは、「だいぶ参考になりました。ちょっと聞いたことについて様子を見ていきたいと思います。」(原文ママ)という感想が聞かれた。

前回と同様、この回の相互検討でも、小学校の教師から提示された課題（児童の気になる行動）が、園の教師と共有され、解決策（改善策）に関与するということが行われた。そのため、協働のレベルは「レベルⅡ-①、②」のままであった。

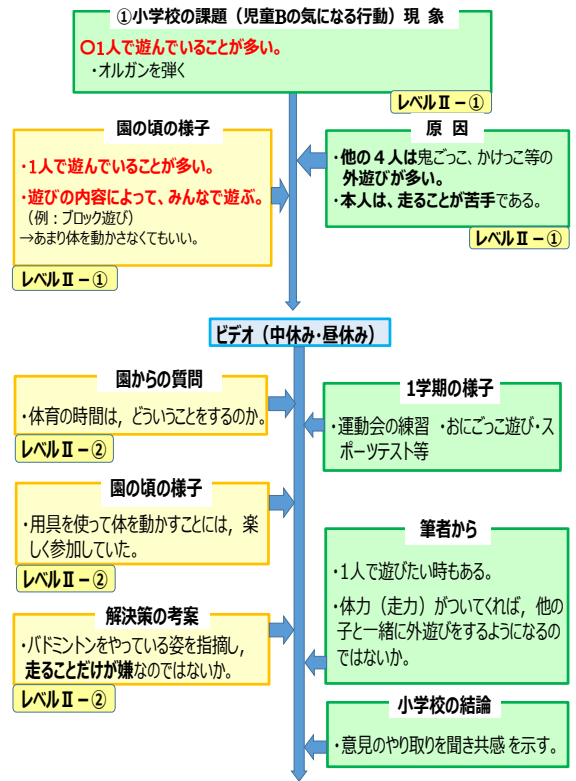


図5 第3回相互検討の概要とその結果

エ 第4回「児童の気になる行動～授業中において～」(7月)

最初に授業中の映像を見た。すると、園の教師は、前回提示された課題「児童Aを意識し過ぎる」に関連したことを質問（班分けや座り方について）したり、指摘（2人の席が近いこと）したりする等、積極的な関わりが見られた。これに対して、小学校の教師は、学習活動やこれまでの関わり方について、自身の指導観にも触れながら述べていた。そして、「園ではどのように関わるのか。」という質問が発生し、園の教師からは園児の実態と園での関わり方が示される等、課題の解決策を検討するまでに至った。小学校からは、児童Aの「こだわりがある」という課題が提示され、その具体的な行動も幾つか示された。これに対して、園の教師は、具体例を挙げながら園の頃も同様であったことを述べ、共感を示すだけであった。そのため、小

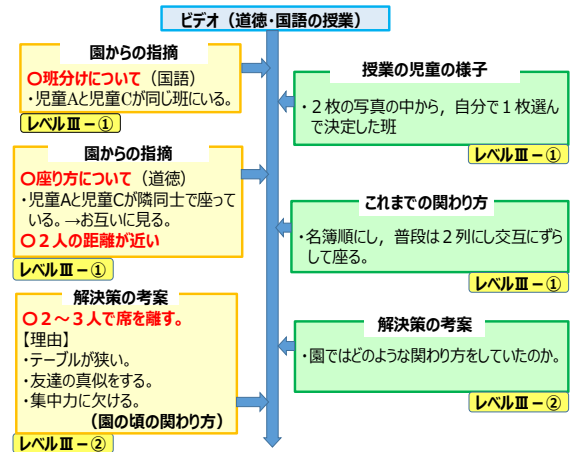


図6 第4回相互検討の概要とその結果

学校の教師にとって園の頃の様子を知ることには繋がったが、解決策の考案までには至らなかった。

小学校の教師からは、「1学期あまりにもお互いにちょっと意識し過ぎるところがあったので、何か作業する時は離そうかなあ。」(原文ママ)という感想が聞かれた。

今回の相互検討では、これまでとは違い、園の教師から小学校の教師の課題(児童の気になる行動)に対して質問や指摘が行われ、さらに解決策(改善策)が検討されるということが行われた。そのため、協働のレベルは「レベルⅢ-①, ②」へと変容する話合いであった。

オ 第5回「園での関わり方について～年長児の活動において～」(8月)

実際に年長児の活動を参観し、「小学校の教師が気になったこと」について相互検討を行った。提示された「気になったこと」は、「子供が集中して活動に取り組んでいること」、「園の活動(行事)に関すること」、「クレヨン等を使って描くこと」、「個人差に関すること」の4点で、入学前の描く体験の大切さについての指摘もあった。これに対して、園の教師は、園での関わり方や活動内容、来年度入学予定で特別な支援を要する園児の関わり方を示した。最後に、「入学前の体験」に関連して、筆者が「入学前に身に付けさせたいこと」を話題に取り上げ相互検討を行った。すると、園の教師は、当番や身の回りに関すること、小学校生活を意識しながら指導していること等、具体例を挙げて園での関わり方を示した。そのため、小学校の教師は、係活動で見られる児童らの上手な発表の仕方は園での指導の成果であることに気付かされ、園での学びが小学校へと繋がっているという共通認識が図られるまでに至った。

園や小学校の教師からは、「一応、身に付いてるんですね。」「話を聞いていて、なるほどなあって思うことがいっぱいある。ちゃんと身に付いていてすごい。小学校でだめにしないようにね。」(原文ママ)という感想が聞かれた。

今回の相互検討では、小学校の教師が気になったことを指摘し、それに対して園の教師が答えるということが行われた。さらに、これまでは小学校に関する課題(児童の気になる行動)だったものが、小学校が園での関わり方や園児の実態を知ること、園と小学校の両者に関する課題(気になる行動と関わり方)へと変容し、検討されるということが行われた。そのため、協働のレベルが「レベルⅣ-①」へと到達する話合いであった。

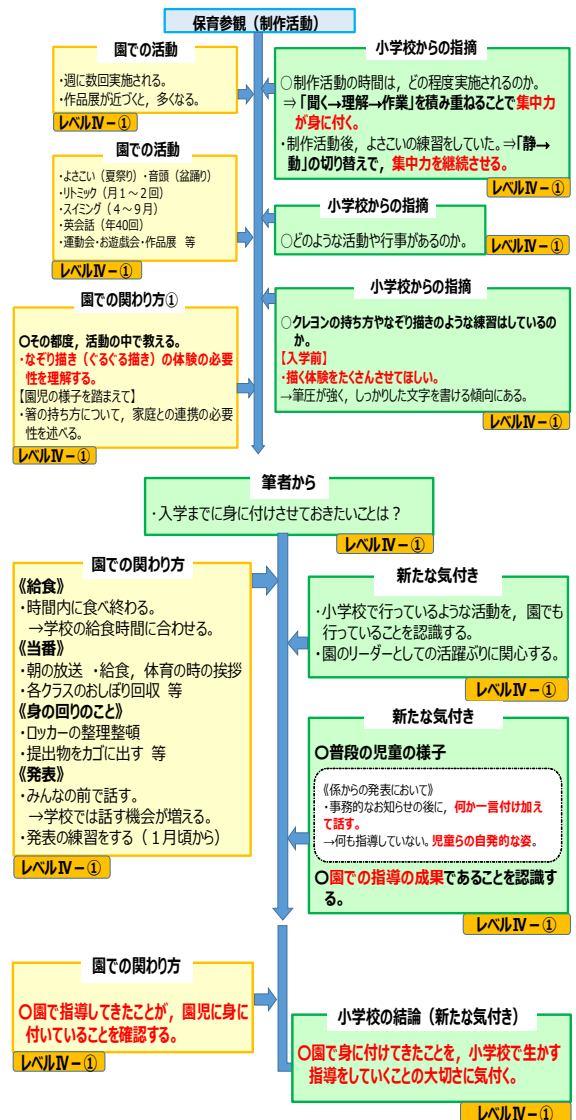


図7 第5回相互検討の概要とその結果

(4) プログラムの実施後と結果(半構造化面接)

一人あたり20分程度で、個別に半構造化面接を行った。三つの質問項目を準備したが、補助的な質問も取り入れ実施した。それぞれの質問項目に対して、連携(協働)に関する要素が表れている回答をプログラムの効果として考え、表4から表7に示す。

ア 幼保小連携(協働)で良かった点について

「教職員同士による話合いをしてみて、良かったことがあったら話してください。」という問いには、「しっかり小学校の生活に移行できていたことを知り安心した。」「園からたくさんの情報を得ることができた。」等、連携(協働)することの有用性を感じている回答が得られた。

表4 項目1

○教職員同士による話し合いをして、良かったと思うことがあったら話してください。

【園】

- ・卒園した後、どのように小学校生活を送っているのか、園での生活と小学校での生活は全く違うものがあり「大丈夫かな。」と気になっていた子供達も、しっかり小学校の生活に移行できていたことを知り安心しました。話を聞くことができて、ほんとすごく良かったなあと思いました。
- ・授業の様子を見て、気になっていた子が良い意味で全然違う感じになっていることを知りました。口頭だけの伝達ではなく、映像を見た方が実際の子供達の動きや活動がわかり記憶に残るのですごく良かったです。

【小学校】

- ・たくさん情報を得ることができました。
- ・特に1名とても気になる子供がいたので、3月の話し合いから入学に向けて、園の先生からいろいろお話しいただいたことを参考にしながら準備ができました。その児童にとっては小学校への壁が少し低くなったのではないかなあと思います。
- ・他の児童についても、いろいろと情報を得ることができたので良かったなあと思います。
- ・実際に保育参観したり、いろんな場面のビデオや写真を見たりしたので、実際の様子が分かって良かったと思います。

イ 幼保小連携（協働）でためになった点について

「教職員同士による話し合いをしてみて、ためになったことがあったら話してください。」という問いには、「少しでも役に立てたのではないか。」「意外と知らないことがたくさんあった。電話でも聞きやすくなる。」等、多様な面から連携（協働）の有用性を示唆する回答が得られた。

表5 項目2

○教職員同士による話し合いをして、ためになったと思うことがあったら話してください。

【園】

- ・園の頃の子供達の様子について、今まで小学校の先生達は分からないこともたくさんあったと思います。園での様子を話すことができ、少しでも役に立てたのではないかと思います。このように詳しく話したり聞いたりしたことがなかったので、お互いにとってとても良かったのではないかと思います。
- ・最初はどうなるのだろうか、どんなことをするのかと不安でしたが、いろいろ分かったので自分のためにはなりました。

【小学校】

- ・園での様子について、何となくは知っていたけれども、意外と知らないこともたくさんありました。子供達はいろいろなことをして入学していると思いました。保育参観は今までしたことがなかったので、新たな発見や参考になることがたくさんありました。
- ・個人としてはとても良かった。園からの要録だけでは分からないこともある。実際、このように話してみるといろいろなことがきくとあると思うので、学校としてこの連携をどのようにやっていったらいいのかなと思う。
- ・ちょっとつながりができれば、電話でも「こういう時どうしたんですか。」って聞きやすくなると思いました。

ウ 幼保小連携（協働）で困った点について

「教職員同士による話し合いをしてみて、困ったことや難しかったことがあったら話してください。」という問いには、両者とも「特にない」という回答であった。

表6 項目3

○教職員同士による話し合いをして、困ったこと・難しかったと思うことがあったら話してください。

【園】

- ・特になかったです。
- ・話し合いの時間は遅番と重なる時間帯ではありましたが、周りの先生達に協力してもらったので実施することができました。
- ・遠慮せずに話していたと思います。

【小学校】

- ・特にないです。
- ・放課後の時間で設定されていたので実施することができました。
- ・生活面においても学習面においても気になるところがあるので、いろいろな角度から見るという点では、テーマを変えて話し合えたのは良かったと思います。
- ・子供達のために、園ではどういう状態だったのか知りたいという思いがあるので、特に聞きにくいということはありません。

エ 児童への関わり方に関する意識の変容について

「教職員同士による話し合いをすることで、子供への関わり方（見方や指導の仕方等）が、これまでと何か変わりましたか。」という問いには、「これまでの指導の仕方の良いことを実感した。」「園の頃との違いが分かったので、今後の様子に気を付けて児童を見ていきたいと思った。」等、児童への関わり方について今後の方向性を示す回答が得られた。

表 7 項目 4

○教職員同士による話し合いをして、子供への関わり方（見方、指導の仕方、考え方）がこれまでと変わったことなどありますか。

【園】

- ・園では、小学校へあがるための準備をして、年長児たちが月日を追うごとに入学に向けて取り組んでいます。小学校の先生の「こんなにはできるんだ。」という感想を聞いて、指導の仕方としてはこのままでいいのかなと思いました。

【小学校】

- ・特に関わり方を変えたということはないです。ただ、一人一人の頑張りや園の頃との違いについて幾つか分かったのので、小学校での頑張り在今后気を付けて見ていかなければいけないと思いました。
-

5 考察

本研究では、佐古・田中ら（2003）の教師間の関係構築プログラムに基づき、幼保小の教職員間の関係を構築するプログラムを作成・実践し、その効果を検証した。結果、協働のレベルにおいて「IV-①」の段階への到達が見られた。その要因を、前述の2（1）～（3）にある本プログラムの三つの特徴と関連させて考察する。（1）に関して、相互検討する内容を「就学前教育と学校教育の段差の相互理解・児童理解・児童の気になる行動への関わり方」にしたことで、両者とも、互いに関わっている子供について知りたい情報だったため話しやすかったことが協働のレベル向上に繋がったと考えられる。（2）に関して、実際に活動している子供の姿を見たことで、園の教師が頑張っている子供の姿を確認したり、小学校の教師が課題提示されていない子供の様子を伝えたりすることができた。さらに、自分では気付かない課題を指摘し解決策（改善策）の考案まで至る話し合いをすることができた。そのため、協働のレベルⅡからⅢへの向上に繋がったと考えられる。（3）に関して、互いの教育に関して相互理解できるように、小学校の教師が保育参観し、その後で「園での活動や関わり方について」話し合いをしたことで、園での学びが小学校へと繋がっていることに両者とも気付くことができたと考えられる。そのため、協働のレベルIV-①への到達に繋がったと考えられる。

半構造化面接の感想データの項目1や項目3の回答からは、園も小学校も課題「子供の気になる行動」を抱えていることが分かり、そのことについて教職員間で話し合うことに抵抗感なく取り組むことができたと考えられる。また、項目1の回答からは、ビデオや参観など実際に子供の姿を見る活動の有効性も示され、活発な話し合いに繋がったことが、協働のレベルの向上に影響を与えたと考えられる。項目2の回答からは、研究対象の教師が互いに関わっている子供について理解することができる話し合いは、互いに役に立ったと捉えていることが明らかとなった。また、小学校の教師は、接続期における児童の気になる行動への関わり方について園と連携することで解決策の幅が広がることを指摘し、話し合いの継続実施を望んでいることも分かった。項目4の回答からは、園も小学校も子供の関わり方について今後の方向性を見い出すことができたと考えられ、意識の変容が明らかになった。以上のことから、本プログラムで行った幼保小の教職員間で話し合うことを定期的に継続実践する取組は、両者の関係を構築することについて、一定の効果があると推測される。

IV 研究のまとめ

本研究では、幼保小の教職員間を対象とした教職員間の関係構築プログラムを作成し、実践することを通して、幼保小の教職員間の関係が構築されるかどうか、プログラムの効果を検証した。その結果、協働のレベルにおいて、4段階のうちのIV-①のレベルまで到達したことが認められた。以上のことから、本研究で作成した「幼保小の教職員間の関係構築プログラム」を実践することにより、幼保小の教職員間の関係が構築されることが示唆された。また、幼保小の連携をすることで、①教職員間の協働意識（コミュニケーションの質）は高まる、②幼保小の教育に関する相互理解が深まる、③互いに関わる機会の重要性を認識する、

以上のことを確認することができた。

V 研究の課題

本研究では、一つの園から就学する小学校での実践であったが、多数の幼稚園・保育所等から就学する小学校で行うためにはどのようなプログラムが適しているかは、更に検証が必要であると考え。しかし、今回作成したプログラムを基に、それぞれの学校事情に合うようにプログラムの内容を改変し実施することは可能なのではないかと考える。また、レベルⅣ-②に到達するための手立てとして、本研究で作成したプログラムの中に、幼児・児童の実態を踏まえたカリキュラム（アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム）について相互検討する時間を組み込むことが必要であると考え。

〈引用文献・URL〉

- 1 新保真紀子 2001 『「小1プロブレム」に挑戦する一子どもたちにラブレターを書こうー』 pp. 11-22 明治図書
- 2 小林宏己 2009 『小1プロブレムを克服する！幼小連携活動プランナー考え方と実践アイディアー』 pp. 7-12 明治図書
- 3 文部科学省 2010 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/houkoku/1298925.htm (2020. 1. 19)
- 4 文部科学省 2016 「平成28年度幼児教育実態調査」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/08081203.htm (2020. 1. 19)
- 5 東京学芸大学「小1プロブレム推進プロジェクト」代表 大伴潔 2010 「平成19年度～平成21年度 小1プロブレム研究推進プロジェクト 報告書」 <http://www.u-gakugei.ac.jp/~shouichi/project/index.html> (2020. 1. 19)
- 6 島根県教育センター浜田教育センター教育相談スタッフ共同研究 2012 「幼保小の望ましい連携の在り方を探る（2年次）」 https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/kikan/matsue_ec/chousa_kenkyu/h21-h25kenkyuseika/H24_tyousa_kenkyuu.data/H24-3_youhoshou.pdf (2020. 1. 19)
- 7 お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校 子ども発達教育研究センター 2008 『「接続期」をつくる 幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働』 p. 29 東洋館出版社
- 8 佐古秀一・久我直人・大河内裕幸・山口哲司・花田成文・荒川洋一・田中道介・渡瀬和明 2003 「省察と協働を支援する学校改善プログラムの開発的研究（2）」『鳴戸教育大学研究紀要第18巻』 <https://ci.nii.ac.jp/naid/110000954624> (2020. 1. 19)
- 9 田中道介 2000 「教師の省察・協働を支援する学校改善プログラムの開発的研究ー異学年の合同活動を組み込んだ試みー」『鳴門教育大学教育経営コース修士論文』

〈参考文献・URL〉

- 1 文部科学省 2017 『小学校学習指導要領（平成29年告示）』
- 2 文部科学省 2017 『幼稚園教育要領（平成29年告示）』
- 3 厚生労働省 2017 『保育所保育指針（平成29年告示）』
- 4 内閣府 2017 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）』
- 5 佐々木宏子 2004 『なめらかな幼小の連携教育 その実践とモデルカリキュラム』 チャイルド本社
- 6 全国幼児教育研究協会 2006 『学びと発達の連続性 幼小接続の課題と展望』 チャイルド本社
- 7 秋田喜代美 第一日野グループ 2013 『幼保小連携 育ちあうコミュニティづくりの挑戦』 ぎょうせい
- 8 木下光二 2010 『育ちと学びをつなげる幼保小連携ー小学校教師が幼稚園へとび込んだ2年間ー』 チャイルド本社
- 9 横井志保 2007 「幼保・小の連携における情報交換会の持ち方とその課題ー愛知県K市の調査を中心にー」『愛知教育大学幼児教育研究第13号』 <https://core.ac.uk/download/pdf/147577927.pdf> (2020. 1. 19)